研究雑話 (7)

型ハメ遊具の製作、「お手つき」と「みかえり」
手は突き出た大脳、セガン教育の原理（五）

藤井力夫

前回は、「アー」、「アー」なら言ぶだけで、「ババ」、「パパ」、「ママ」と反復できるならお話しできるようになる、とするE・セガンの考えについて書きました。たしかに養護学校などで「母音」しか話せない子どもが以外に多く、「子音＋母音」の発音ができればもっと意志疎通ができるのにと残念に思うことが少なくありません。また、破裂音の発達の過程、即ち、両唇による「パパ」から舌と歯茎部の「タタ」、口腔の奥での破裂音「カンカン」へと複雑になる過程が、まさに姿勢の発達に関係し、砂場遊びなど中腰姿勢での活動が重要な役割を演じていたこと。卓越した指摘に驚かされます。

今回は、この期の子どもたちを対象として考案したセガンの型ハメ遊具についてお話ししたいと思います。みなさんよくご存知の円、三角、四角、楕円、ひし形などさまざまな形をくりぬいた型ハメ遊具です。これはセガンの創作したもので、その後、モンテッソリの教具、ゲゼルの知能検査へと発展していきました。

「概念は、二つの感覚、聴覚と視覚により到達する。どちらかと言えば聴覚は受動的で、視覚は能動的である。受動的な彼らに働きかけるのだから、我々としては視覚に訴えることが大事である。そしてまた、この知覚は行為の所産であるからどのように行為させるか、これが問題である。知能の鉗子としての遊具、私は型ハメ課業にこの役割を期待した」（一八四一）。

セガンは、形の学習だけでなく、他方でいつもコトバの獲得の基礎として、ここで発揮される目の力について触れています。以下、二語文の獲得期における目の役割についてお話ししたい。

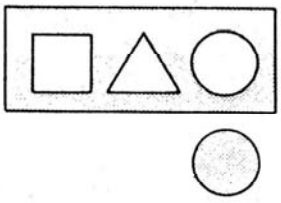
図Aは、ゲゼルのハメ板課業で、十年以上前、札幌の保育所の子どもたちに実施したものです。円、三角、四角にくりぬかれた基板の円孔に円板を入れる課題です。問題は二回目の試行で、基板が一八〇度回転されます。手前にあった円孔が左側になるわけです。子どもはどう対応するか。その特徴をBに書きました。最初は手前の四角孔に重ねて切れてしまう。歩き始めの段階ではこうで、押したり引いたりするのが好きになる一才三ヶ月児では、回転が待てない。椅子にもちゃんと座っていないで回転中も目を放さず、それに引きずられて偶然入る。それが歩行が安定してくる一才八ヶ月ごろになると、待つことができるようになり、回転後、円板をもつ。が、なかなかは入らない。手前の四角孔、三角孔とお手つきして円孔に到達します。この円板をもちお手つきする力と、「パパ」「マンマ」「ブブ」としっかり発音できることとが対応している。とても興味深い。

でも、なぜ入らなかったのか、まだ元のところを見返る目にはなっていません。一才十一ヶ月ごろ、立ったり座ったりかなり自由になり、砂場でも鶏小屋の前でも蹲踞の姿勢で座って見ている段階の子どもたちになって、状況が一変します。彼らは、最初入らなかった手前の四角孔を見返るのです。これではじめてなぜ入らなかったのか確認できたことになります。「○○ではなく○○だ」。こうして二才三ヶ月ごろにはほぼお手つきなしに入れるようになります。丁度この時期は二語文と呼ばれる時期で、「ココ、パパ」、「ココ、ママ」、「チョウダイ、アメ」、「チョウダイ、オカシ」など、お話しできるようになるのです。目で確かめることが、同時にコトバとしても「○○ではなく○○」、「ココ＋○○」とお話しできるようになるのです。したがってこの時期、大きいと小さい、円と四角とか反対の概念についても認識するようになるのです。

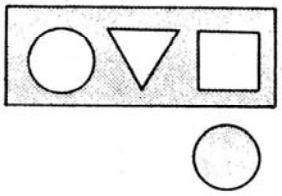
（北海道教育大学助教授）

A．ゲゼルのハメ板

a．1回目



b．2回目（180度回転）



B．発達段階（回転後の動作）

1．回転後、四角孔に重ねて切れる。（1才1ヶ月）
2．回転を待つことができない。（1才3ヶ月）
3．回転後、お手つきして円孔に入れることができる。（1才8ヶ月）
4．お手つきして入った後、手前の四角孔を見返る。（1才11ヶ月）
5．形、位置について知っており、お手つきなしで入れる。（2才3ヶ月）
6．三角板など、予め向きも調節して入れる。（2才11ヶ月）